

論 文 要 旨

論文題目：保育的雰囲気を支える「子どもと哲学する時間」

—保育園5歳児クラスの対話から—

氏名：佐藤嘉代子

本論文は、ある保育園の5歳児クラスの「子どもと哲学する時間」において、どのような対話がなされ、それによって子どもや保育士、そして園にどのような変化をもたらされるのかを探ることを目的とするものである。分析にあたり、ボルノウの「教育的雰囲気」を基に、保育する者とそれを受け入れる者との間に通いあう雰囲気を「保育的雰囲気」として捉え、保育実践を読み解く視座とした。

研究の発端は、子どもが自ら課題に向き合い不思議なことを探ろうとするとき、保育士に求められる役割は何だろうか、どのように支えれば子どものその不思議な思いが充足されるのだろうか、という問いにある。筆者はこのような不思議を探究しようとする活動は子どもの遊びと重なると考え、この遊びを支えるヒントを得るために、子どものつぶやきに耳をそばだて、子どもの思考のプロセスと遊びとの関わりを探りたいと考えていたが、そのような折、フランスの映画『ちいさな哲学者たち』を見る機会があった。もし、日本の同年齢の子どもたちと哲学することに取り組んでみたら、どのような問いが生まれ、どのような対話が展開されるだろうかと考えた。

そこで、ある社会福祉法人保育園の5歳児クラスを対象としてアクションリサーチを行なった。研究に際しては、「子どもが哲学する」ことを「生活の中で不思議だと思うことを思考しその驚きを内省し言葉を探すこと」と捉え、保育士とクラスの仲間と共に対話する「子どもと哲学する時間」を設定し、その記録を映像及び音声にて収集し、さらに保育士への半構造化インタビューを行い、それらの記録を主な分析の対象とした。

本研究の結果は二部構成で示した。第1部は「子どもと哲学する時間の」対話内容の特徴について、第2部はその取り組みの過程で子ども、保育士、園の保育がどのように変容したのかを論じた。第一部の第1章ではフランスの幼稚園の実践に倣って、輪になって座る子どもたちの中央においたローソクから発展した、子どもたちの「火」の不思議についての対話を分析した。第2章「いのち」をテーマとした対話の分析では、アニミズムとセンス・オブ・ワンダーが混じり合う子どもたちの語りの特徴について、第3章では子どもたちが事象を身体感覚で捉えて対話がなされていたことを明らかにした。第2部の第4章では一人の園児に焦点を当て、その園児の変容が園長および保育士の変容をもたらし、さらに園全体の保育の変容に至った事例をとりあげた。第5章では保育士の役割と葛藤について、第6章では保育現場での受け止め方について検討した。これらの記録及びインタビューの分析から明らかになったことは、保育的雰囲気が「子どもと哲学する時間」を支えていたことである。保育士は子どもの傍にい

て子どもの眼差しや問いを受け止め、時に呟きをキャッチする。「子どもと哲学する時間」では子どもたちが仲間とともに対話し、言葉に出会い、不思議を共有しあえるなかで新たな問いに導かれ、様々な驚きを探っていた。そのような対話では、安心して自分をさらけだせる保育的雰囲気不可欠であること、この保育的雰囲気こそが保育士と子どもたちとの関係を結ぶ情感的基底であることが明らかになった。

しかし、本研究では同じ保育士が3年間連続して年長児クラスを担当したものの、「子どもと哲学する時間」の設定が不可能であった年度があった。第1、第2ステージの中間の年度に「子どもと哲学する時間」が設定されなかったのは、「子どもと哲学する時間」を可能にする子どもたちと保育士との間の関係が構築されていないと担当保育士が考えたからであった。

以上のことから「子どもと哲学する時間」を可能にするためには、対話のファシリテーターである保育士と子どもたちのあいだには、単なるくつろいだ雰囲気とは異なる、子どもたちの深い学びを志向する関心事を支え共に探究する人間としての対等な関係性と、保育士の柔らかな眼差しと言葉で包むような安らぎの雰囲気が不可欠であるということが明らかになった。このような保育的雰囲気があって初めて「子どもと哲学する時間」が子どもたちに受け入れられた。

今回の実践では、「子どもと哲学する時間」における対話の意義についての園全体の理解が重要であること、同時に、子どもが哲学することに関する様々な情報も必要であることが明らかになった。今後のさらなる実践が求められよう。そのための課題には、一つは幼児の哲学に関する研究推進が必要であること、二つ目はファシリテーターの養成の課題があることが示唆された。これらは、保育士の資質・能力の向上の課題に他ならない。保育士には、保育において哲学しようとする構え、なによりも言葉に敏感になることが求められていると言えるだろう。